

せたがむい

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 4212590
第163号・平成15年4月1日

年表で読む

古平の歴史

《69》

小学校教育

1

■浜中小学校新築

明治13年に竣工した、当時としてはモダンな浜中学校校舎が明治20年、原因不明の出火で全焼したため、一時、倉庫などを教室代わりに授業をしていた。

翌21年、官有の建物を買い受け、浜町に135平方メートル(約41坪)の校舎を新築したが、極めて狭い校舎であった。

その後、児童数も増えたことから明治26年7月、現在の町役場裏手の辺りに工費2万1千円余りで、733平方メートル(222坪)の校舎を新築した。

■簡易科という課程

明治新政府になり、何もかも

別に簡易科という制度も設けられた。

北海道庁では道内の特殊な状況から、翌年、小学簡易科を設置する規則を設けた。そして全道の小学校を査定し、尋常科・高等科併置校は3校、尋常小学校は小樽(量徳小学校)ほか7校で、この10校以外はすべて簡易科の学校とした。

字・算術・実業(年長の女子は裁縫など)に、修身・体操を加えることにした。

こうなると、科目や週の授業時間は尋常科とほとんど同じになり、修業年限は3年のままにしておいて、経費をあまりかけないで教育内容を高めようという意図していることがうかがえる。

これによって「……各小学校の多くは授業時間を増し、二科目を加えて授業を行っているので人々に満足感を与え、いっそう教育の普及につながる」と、歓迎された。

本州では例外的とされていた簡易科という課程の学校が、北海道では初等教育の中心になってしまったことから、地方では教育についての不満が出た。

明治23年、政府は初等教育の整備と充実を図るため、また小学校の規則を改正し、尋常科の修業年限を3、4か年と定め簡易科を廃止した。

そこで道庁ではさらに翌明治22年、小学校簡易科の規則を改正した。

明治23年、政府は初等教育の整備と充実を図るため、また小学校の規則を改正し、尋常科の修業年限を3、4か年と定め簡易科を廃止した。

新しい規則が作られ国内の大改革が行われたが、教育についても目まぐるしく規則の改正が行われた。特に北海道は開拓間もないので、本州とは異なった小学校規則が定められていた。

先に明治19年、小学校令によって、小学校を尋常科・高等科の二段階にし、それぞれ終業年限を4年間とし、尋常科を義務教育とすることが定められた。

しかし、国内の教育の実情から科目も今までの読書・作文・習字・算術・実業(年長の女子は裁縫など)に、修身・体操を加えることにした。

△表12 浜中小学校児童数

△表13 町内各小学校の児童数

計	学級	学年	男	女	計
	三四三二一	尋常一 尋常二 尋常三 尋常四 温習科	五二二三 四〇一九 三	一六二四 三	七二四三 〇五三六
一六七					
六〇					
二二七					

合	名	男	女	計
計	浜中小 新地小 群来分 沢江分 沖沢分 分校校校校校校	一一六七 一六七八 五五五五	一六〇 五四〇 一五九	二二七 二一五 一六五 六四
三九六				
一三九				
五三五				

で綿糸や網の問い合わせがある。今日、八反田、八など一〇反ばかり出る。電話での問い合わせもあり、田へ電話で注文した。五月一〇日頃までは売れるだろう。店や奥の間のこたつを取りはずす。店のこたつやぐらはテーブルにし、帳場の格子も立てたので夏らしくなったようだ。コナゴ用の網、積丹方面から問い合わせがあるので注文した。

▼四月二六日

雨はまだ止まない。納屋に架けた鯀がこの雨で落ちていたものもある。鯀漁さらに無し。④で二モッコ獲ったというので九尾貰う。魚体も小さくなった。いよいよ終漁らしい。店へはポツポツ建網関係の問い合わせがある。八へ網四反、その他綿糸など一〇〇余円現金で売る。刺網の方

なりの金額になるから、浜町、沢江方面の刺網は元気が良い。

▼四月二七日

起床六時半、天気はまだ晴れ上がらないので道路は悪い。午

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

【64】

三〇反と秤ほろなどが入った。雨が上がったがダシ風が強く、これからは火の用心が大切だ。父と子供たちが農園へアサズキを採りに行く。

▼四月二八日

起床六時半、待てどもさらに鯀漁無し。今日珍しいような好天気だ。快晴で風はなし、ナギはよし、こんな時に鯀大漁であればと思うが、困ったものだ。熊さんは農園行き。店は割合ヒマ。美

あり二〇余円売る。網の照会がポツポツある。例年、二〇〇間ぐらひは出るので仕入れておかねばならぬ。①大岡へ問い合わせたら一〇〇間、一一八円とのこと。これはずいぶん高いが五〇間だけ注文した。今日は母の命日で和尚さんが来られる。餅をついたので出す。自転車で局まで行って来たが、建網はまだ建

て込んでいるが、刺網の連中は皆網洗いをしている。困では店を仕切って局舎に改造中、近いうちに業務が始まるようだ。浜町の人には便利になる。

▼四月二九日

起床六時半、天気快晴。小鯀のようなのがあちこちで二、三モッコ獲れたというが、いよいよ終漁らしい。農園では雪囲いをしてい

る。夜、北斗団（沢江村青年団）からの火防宣伝ビラが廻って来た。これからの時期は互いに火事には注意しなければならぬ。

▼四月三〇日

起床六時半、今日も天気快晴。建網は投網しているが、一向に漁は無い。寂しいことだ。刺網連中は網片付けや納屋下ろしをしている。身欠一本一〇〇〇円か

日に五〇〇六〇束宛て獲れるというので、夜一〇時頃出漁、ろくろく眠らずにまた出漁している。値段も一束四円五〇銭という近年にない値段と大漁で、タラ釣り連中は皆元気が良い。従ってわれわれの商売の方もよろしい。

▼五月一日

朝から雨降り、寒くてアラレでも降りそうな天気だ。熊さんは身欠抜きをする。私は倉庫で商品の在庫調べ。鰾刺網一〇〇〇円、カレ網一〇〇〇円、建網一〇〇〇円、ロープ一〇〇〇円、岩糸七〇〇円、アバ網二五〇〇円、合計一万円以上の品がある。昨年はアバ網、網などずいぶん仕入れ資金も忙しかったが、この分だと本年は八、九月になったら、金融も余程楽になるだろう。

▼五月三日

風寒く曇天。網を揚げたところもあるが、昨夜④で半杯程鰾を獲った。ほかは全く無いという。店の方は閑散としている。共栄丸で、秤(はかり)、行李(うり)などが入る。そろそろ出稼ぎ支度が始まるだろう。

▼五月四日

起床七時。今日も風が寒い。コタツにでも入りたいぐらいだ。鰾漁は全く無く、そろそろ揚網が始まった。浜はますます寂しくなる。熊さんと人夫が農園に行き、リンゴに葉掛けをする。午後、銀行へ行き、帰り入船町に廻ったら、今日もタラは大漁で三〇束ぐらい獲れたという。旧の四月八日なので、家では餅の馳走だ。夜、帳簿整理をする寒い晩だ。

▼五月五日

起床六時半、建網も切り上げなので綿糸や岩糸が売れる。午後一時頃から小雨がシヨボシヨボ降り出す。先日から来ていたお客さんが、一時の余市行き千代丸に乗り込むので浜まで見送りする。これから大沼方面を見物するのだという。珍しい程の上ナギだ。

▼五月六日

今日も寒く、コタツにでも入りたいようだ。建網も全部揚網してしまつた。帳簿整理のあと久し振りに大へ遊びに行く。いろいろと話をして一〇時頃帰る。不漁とは言いながら刺網

連中は割とよろしい。身欠一本二、〇〇〇円から二、五〇〇円で売った人が多く、こんな高値は珍しい。従って刺網連中は元気がよい。

▼五月七日

朝曇天であつたが、正午頃から雨になる。店も建網が五日までに全部揚網したので、綿糸類の売れ行きがよい。今日は日曜日なので子供たちもみんな農園へ行く。農園で昼食を食べたが、おいしかったと皆喜んで帰つて来た。今日、佐渡行きの汽船摩耶丸が入港したので、家で架けておいた干物を(タラ、身欠⑤)へ送る。

▼五月八日

曇天。漁が無いので鰾の干物類も不足だ。不漁といつても、時期になると瀬戸物売りなどが来る。新地では浪花節、活動写真、小原節などの興業が絶え間なくある。芳太郎さんが入舸から陸行したとの電話があり、熊さんとマサさんが迎えに出で、六時頃着いた。

▼五月九日

今日は一日中雨だ。午後三時頃、介から芳太郎さんを連れて

遊びに来てくれとのことだ。せつかくの厚意なので出かけた。山海の珍珠の酒肴が出て大変ご馳走になった。帰りには赤飯とお菓子のお土産まで頂いて、雨の中、十時頃帰つた。

▼五月一〇日

昨日来の雨も一〇時頃には晴れ、町も今は鰾製品の出盛りだ。仲買連、馬車屋、ハシケ、回漕店などは忙しい。本年は身欠が二、〇〇〇円以上もするので刺網連は景気がいい。⑥共同歩方から三六〇余円の品代が入金した。本年の漁から見て、支払いも延期かと思つていたが実によかつた。この分だと掛売金もたいてい入金するだろう。今日も四、五軒から入金がある。二十日頃までには三、〇〇〇、四、〇〇〇円は入るだろう。午後から銀行へ行き、三原へ六〇〇余円払い込みをする。帰り、山へ寄る。タラ釣りも餌にする鰾がないので終漁とのこと。こんなことは全く近年稀なことである。タラは大漁そして値段も一束四円五〇銭という珍しい高値で景気がよい。⑦に寄り話をして帰る。

(続く)

札幌通信 第4信

ふるさと古平の宝物

「高野名日記」に感謝

吉 川 義 雄

自分が鯨場の最中に生まれたことぐらい、大正十一年三月二十五日という日付けで、ノンビリ育ちの私でもすぐに分かった。

あの忙しい最中、働き者の母はどうしていたんだろうと、自分が大人びてゆくと共に余計な心配がふくらんだが、ついぞ母から聞くことはなかった。

戦場のような鯨場の姿は、物心のついた頃からイヤという程知ったから、こんな時生まれた私の存在は邪魔者だったのか、喜んでくれたのやら、まるで見当もつかないし、他人事みたいに妙に知りたかったが、自分の口からやすやすと聞かれることでもない。

『せたかむい』百号から、高野名幸作さんの「日記」が発表され始めたが、まだ大正八年。

私の生まれた年まで続いてほしいと念じていたが、連載されたから五年目。61回を経て、ついに私の生まれた鯨場に遭遇することができた。感動でした。

いつもながら活写されている古平の姿であるが、要文を勝手に編集させていただき、生まれた日の前後を分からしめていたのだ。

20日 朝から吹雪で、また寒中が来たよう、九時から風が吹き出し、板戸がガタガタ鳴り、海は時化になった。この分だと鯨はいつのこととやら。

21日 朝のうちは晴れていたが、午後から大時化(大吹雪)になった。

21日 朝七時、寒さも強く、吹雪もひどくなる。

(23日欠)
24日 寒風が吹き、吹雪と

なる。海も大時化が続く。これで七日間も時化続き。夜になっても板戸がガタガタして、海は大荒れた。

25日(私の誕生日) 時化

も少しおさまったようだが、まだ投網できぬ。今頃は、昨年も一昨年も初鯨を見たのに、今年も時化とこの寒さで遅れた。明日は天気もよくなるだろう。

26日 永らくの荒れも、ようやく快晴となった。五時頃から建網を建て込む。刺網も刺した。浜も鯨場らしくなってきた。

27日 今朝の鯨漁はと、早く浜に出てみる。四尾とか、ひとモツコぐらいとか。美国でさんば船で一杯とか。ボタボタ雪が降り出してきて、夜は静かになった。

28日 浜中の八反田(歩方)で、さんばで三杯。種金は一杯。刺網は五十から六十尾獲つたらしい。今年の初鯨だ。古平では九部通り初鯨を食ってはいないだろう。

29日 夜来の雪で、今朝も二、三寸積もる。三月でこんなに寒く、雪の多いのも稀だ。

30日 今日快晴。ようやく春らしい天気になった。みんな網を入れた。今夜こそひと漁あるかも知れない。

31日 快晴だが鯨漁無く、寂しい限りだ。

今から八十年前の、3月25日を中心にして要約させていただいた古平の鯨場。これ程確かな証言は無いだろう。それにしてもこの年は、なんて厳しい環境だったのかと、あれこれ時代の変化に驚く。

ともあれ、こんなときに私を生んでくれた母に感謝もし、皮肉なことに、少しも忙しくなかった鯨場の姿を知り、今にして妙な安堵を覚えた。

当時、私を宝物のようにして育ててくれた祖父母も、父母も、今世での縁を終えて、今は居ない。

ふるさと古平に縁ある人たちに、一時代の生きていた庶民の生活を記録して下さった「高野名日記」は、ご自分の意志とは関係なく、古平の宝物である。

やがて『せたかむい』も同じように言われるはずである。

古平いろはづた

幽霊の写真で人気当丸峠

□？写真にビックリ

昭和51年9月、古平く神恵内

間の国道229号線(現在道道

線)の改良工事で撮影した写真

に、一人はちょんまげ姿の男女

がはつきりと写っていた。場所

は当丸峠から古平側にやや下っ

た六志内の山中である。

これには撮影した人もびっく

りしたが、写真を見た人の口伝

ででたちまち町中の評判にな

△ちよんまげ姿で武家風の夫婦が…はつきり写っている▽

り、「幽霊が出現したのでは：

」と、新聞でも報道された。

□怖いもの見たさ

六志内はアイヌ語で「路を流

れる川」という意味で、昔から

神恵内へ通じるけもの道があっ

たので、そこを旅する夫婦者が

何かの事故に遭ったのでは、な

どとさまざまな憶測を呼んだ。

新聞やテレビで報道されたこ

とから、この現代はなれた興

味ある話題は広まり、「幽霊の
出た当丸峠」として一躍有名に
なり、カメラ片手に押しかける
やじ馬で峠は大賑い、という一
時期もあった。

□過去に骨を発掘、供養

大きな話題となった幽霊写真

だったが、さかのぼって昭和16

年9月のこと。

その付近で草刈りをしていた

畑町の小野寺末治さんが、偶然

に頭蓋骨を見つけ警察に届け出

た。連見医師の検査を受けたと

ころ女の頭蓋骨と判定され、禅

源寺で供養を行った後、納骨堂

に安置したことがあるという。

また、このネガを見た専門家

△同じ場所での普通の写真▽

は「いたずらされたという形跡
はない」と言っている。二重写
し防止機能のついてないカメラ
だと、時にはテレビの時代劇と
二重写しをすることもあるがそ
のようなどころもなく、周囲の
風景とも違和感がなく写ってい
る。果たして真実はどうなんだ
ろう。

□安全祈願の供養祭

この改良工事の現場を請け負

った佐々木組(本社・岩内)で

は、もしこんなことが今後、事

故につながってはいけないとい

うことで、現地で供養祭を行う

ことになった。

□幽霊話も消えて

夏も過ぎた時期の、とんだ人

騒がせな幽霊事件もいつとはな

しに話題にも上らなくなり、今

ではそんなことを思い出す人も

いない。

以前だと冬季間は閉鎖されて

いた道路は、防災工事でも完備

し、自然の景観を生かした美し

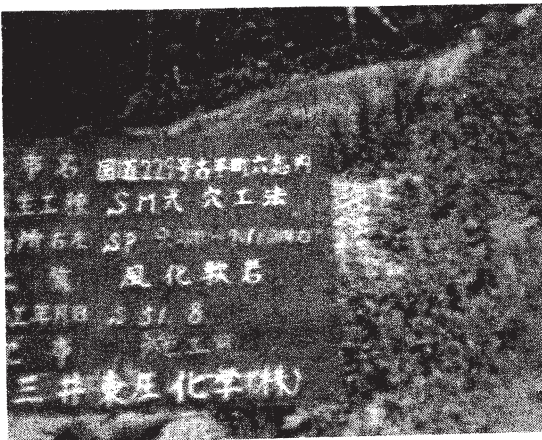
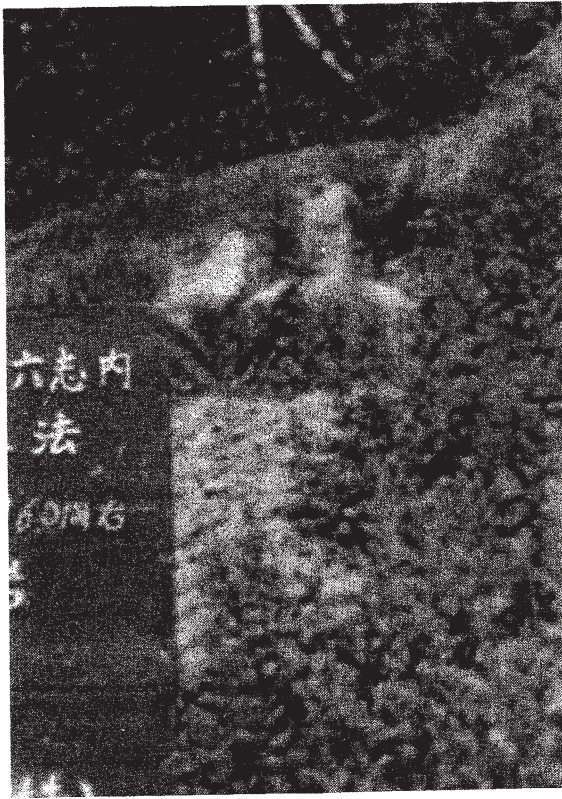
い橋がカーブを描き、積丹半島

脊梁を這う地帯の溪谷美をいっ

そう引き立てている。

もう幽霊話は、夏の夜の夢に

なってしまった。



時計台ギャラリーにて

大 澤 文 子

春とは言いながら海を渡る風は冷たい。沖辺遠く切れ切れに汽笛を鳴らし過ぎ行くはなんの船か。そんな時、ふっと悲しみにおそわれる私だった。

・ふるびらの離れ小島へゆくのかと嘆き給ひし母もはろけし・気丈なる母なりきその筆跡は封書に残り手文庫にあり

男まさりのする文字。大切な文庫の中に今も生き生きと私に問いかける母の筆跡。

昭和二十二年、戦後間もないあの頃、金華丸の影が見えなくなるまで父と共に手を振り続けていたであろう母。

冬になるといつもあかぎれに悩み続けていた母。茶の間の柱に寄りかかり、輝割れした指に軟膏を火ばしで焼きつけていた母の顔。

走馬灯のように頭の中を駆けめぐるのは何故だろう。整理したい思いのままにふれてみようと、この夜ベンをとった。

私共が古平の地へ居を定めた頃は、勿論、漁場のことは何一つ知る由もない。少しでも漁場の知識を得たいものと、よく海岸地帯へ足を伸ばしたものだ。まず驚いたのは、漁港で働く多くの女性の姿だった。

背が丸くなる程厚着をした上に合羽のようなものを重ね着し、厚い布地のもので頬かぶりをしていた。助宗を網からはずす仕事に精だすはずし子の姿である。寒くはないかと幾度思ったことか。だが漁場の習慣もよく知らない私には、声をかけるのもためらわれた。

あれからもう幾十年経ったで

あろうか。

穂井田日出麿氏から「札幌時計台ギャラリーで個展を開くから」と、招待状を頂いた。少しでも助宗漁のことに触れたい思いだっただけうれしかった。夏バテ状態の身体だったが……それに会場はやや遠かったが飛ぶ思いで地下鉄に乗った。会場へ一歩足を踏み入れた途端！

なつかしい助宗漁の香りを身体一ぱいに感じた、はずし娘はぎのこのまやかな動作を描写された数点、たつた今、絵筆を走らせたかのようなみずみずしい画面。漁場の知識の乏しい私でさえ吸いこまれるように魅了されたのだ。着ぶくれたはずし娘が三、四人輪になつて網に手をかけ仕事をしているが、今にも画面から抜け出て私に話しかけてくる様な大作。

色々な状態が描かれているが私にも納得できる数点があった。なお、穂井田氏に伺ったがこの作品は百五十号だという。

昔なつかしい七輪、石油缶を半分につけた器に赤々と木炭火

が描かれ、側に丸い薬缶がひとつ、すばらしい描写にしばし足が止まる。

時計の経過を心配しつつも、このように漁村の生活をリアルにとらえた絵画展に満足し、時計台ギャラリーの階段をゆつくり降りたのだ。

また、鯀漁最盛の頃にはドンザを着用していたというが、私に分かる筈がない。

「耕模様の布地に紺色の裏地を重ね、色々な模様刺子した着物」とあった。屈強な男性にまじり、荒海に耐えた女性の必需品がドンザだったのだろう。

先日、小竹栄子氏、吉野喜美氏にドンザについて色々伺った。腰にしめる前かけにも色美しい糸で刺子し「ふくりん」といつて斜布で縁どりをした由、つらい鯀漁の中でも女性らしいおしゃれな話を聞きうれしく思った。と共に、昔の「家（ヤ）（マ）（シ）（シ）」の鯀漁の歴史を思うようすがともなり、ほのぼのとしたものを感じた夜だった。

中 戦 中 戦
泣き笑いの
樺太漁場体験記
戦 後 戦

吉 野 慶 一 郎

皆の無事を確認 ずうと心
まずはひと安心 配っていた
家族が真岡から戻り、それぞれ
の家族がホッとしたりその数日
後のこと。先に酒田港へ山形県
から来ていた人たちを送り届
け、連絡のあった直後に終戦と
なり、その後ばったり連絡も途
絶えたままだった発動機船が、
突然、帰ってきました。それま
での心配も消し飛んでしまうよ
うな喜びでした。

船頭の話では、海上は危険な
ので情報を確かめるために何か
所もの港に寄り、それで日数が
かかってしまった。幸い航海中
は平穏でよかったとのこととし
た。古平にも立ち寄ったという
ことで、古平の話を聞くことも
出来ました。

先に、連絡船に乗るために大
泊まで行った母や妹たちが、

頼って行った先の鯨場の船頭の
船で無事に北海道に渡り、今は
古平の母の実家である名達家
にお世話になっていて元気でい
ることも聞き、また母からの手紙
も預かって来てくれました。

終戦直前の不安で混乱してい
た時期に、安全を考えて実行し
たことが、すべて出口の見えな
い迷路の中に送り込んでしまっ
たかと、大いに悩み、後悔の念
が頭から離れませんでした。し
かしその三つの懸念も今はすつ
きり晴れて、これで奇跡的とも
いえる程人命を損傷するような
こともなく解決し、本当に不幸
中の幸いであつたと、神仏に感
謝の念でいっぱいでした。

監視の目を逃 「吉野の船が
れ古平へ密航 内地から無事
で戻って来たそう。この様子
だと海上は安全のようだ。」と

いううわさはたちまち野田の町
に広がり、「それなら、寒くな
らない今のうちに本土へ渡ろ
う」と、密航船が次々と港を出
て行きました。

ところが、ことはそう簡単で
はなく、第三国人などの密告に
よつてたちまち出港前に取り押
さえられ、時には荷物から船ま
で全部没収されてしまうことさ
えありました。旧ソ連では密告
はごく日常的なことで全く油断
も隙ありません。

そんな中で、その厳しい監視
の目をくぐり抜けるようにし
て、私の家では酒田から戻つて
来た船を、再び古平に向けて出
港させることが出来ました。

この船の船頭をしていたのが
渡部多吉さん（丸山町の渡部清
勝さんのお父さん）で、真面目
な人でしたから一切を渡部船頭
に託しました。古平に着いたら
船は山川武志さんに預かって
もらうようにとの、頼みの手紙も
書きました。出港を見届けた後
は、ただただ古平までの無事な
航海を祈るばかりでした。

文字通りの 裸一貫で帰国 後、今は裸一

貫となつてようやく古平に戻
て来た私に、あの船が待つてい
ました。

古平に着くと早速、山川さん
が「預かっていた船を返すぞ」
と、笑顔で迎えてくれました。

渡部さんも出身地である山形県
庄内ではなく、そのまま一家が
古平で暮らしているのにお逢い
することができました。今はす
でにお二人ともお亡くなりにな
りました。生忘れることはありません。

野田町にも 終戦後間もな
ソ連軍が進駐 ぐ、初めてソ
連軍が進駐して来ました。当初
は兵士が町にあふれていて、兵
士等の暴行、略奪、強盗などは
目に余るものがありました。こ
れらも軍上層部からの厳しい
取り締まりで間もなく治まりま
した。

電話はすべて切断され、ラジ
オは供出させられ（これは後で
返還されました）、いっぺんに
生活は不自由なものになってし
まいました。夜間の外出は九時
まででしたが、夜は誰も外出な
どする人はいなかったようだし
た。

― 続く ―

ある日、下士官以上の参加で部隊の演習があった。この日は昼食に甘いあんこのぼたもちが出た。ぼたもちといってもアルミの食器に炊いたもち米を入れ、その上にあんこをのせたものであるが、年中腹の減っている初年兵にとつては何よりのご馳走である。演習が終わって竹田班長が帰って来たのは夕方だった。そのときに問題が起きた。ぼたもちを班長のところへ持つて行ったが、うちの班は竹田班長の夕食だけを持つて行った。

そしたらよその班長から、「竹田班長のぼたもちはどうした」と言ってきたが、そのぼたもちはない。

竹田班長も昼食抜きの演習でさぞおなかがすいていたろうに。犯人は同年兵の小澤某という漁師上りの悪だ。その悪が首謀者となって、四人で班長のぼたもちを食べてしまったのだ。

老兵の綴り方

あ、棒太国境守備隊

— 5 —

桶 義 春

槽岡上等兵もびつくりし、下士官室へ行き、「これは自分の教育の仕方が悪かったために起きたことであり、全責任は自分にあります。許してください」と謝り、その後初年兵全員を前にして、

「何てことをするんだ。あんなよい班長はどこを探してもめったにいないんだよ。恥ずかしいと思わないか」と、あの人

のよい上等兵が顔を真っ赤にして怒り、あきれ果てて部屋を出て行った。

その後、白ブタが、「ぼたもちを食べた奴は前に出ろ！」と言ったら、悪の小沢某と三人が名乗り出た。

「このばか野郎！」と、四人が往復ビンタを何発か食らった。それから、「全員向かい合つて二列に並べ。対抗ビンタだ。手を抜いたら俺が承知しない。わかつたら始めろ！」

バシッ、バシッと、一〇発ぐらゐも食らったか。参った。

一人でも悪い奴がいると、全責任をとらされる、これが軍隊の掟(きまり)だ。

あとで竹田班長が内務班に来て、「皆、俺の気持ちかわかるか」と、たつた一こと言つた。

班長として精一杯皆の面倒を見て来たのに、自分の部下から泥棒ネコのような仕打ちを受け、ほかの班長たちに恥ずかしい思いをしたのでは、私がやったのではないが班長に申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

—— 転属となる ——

部隊解散のうわさが本物になりそうだ。隊の組織がばらばらになり南方方面へ行くもの、中国大陸へ行くもの、内地部隊へ転属するもの等々、さまざま憶測とうわさが乱れ飛んだが、誰がどの方面へ行くかは、最後まで分からなかった。

突如、初年兵に軍隊手帳が渡された。見ると三か月の教育召集が、いつの間にか「臨時召集を命ず」と記入されていた。万事休す。三か月に召集解除は絶望的になった。しょうがない、覚悟を決めよう。

忙しくなつてきた。解散準備が始まり、私たち初年兵は毎日のように倉庫の梱包品の整理に駆り出された。

あるとき他中隊の古年兵が、「君はどこへ転属だ」

「自分は札幌の連隊らしいです」

「札幌の連隊は、棒太の気屯というところに行くことになっている。俺は連隊本部にいたので書類を見て知っている」と、教えてくれた。

すると、同じ使役に来ていた同年兵が、

「棒太の気屯なら俺は行ったことがある。親父が馬方なので、子どもの頃親父といつしよに気屯で暮らしたことがある。冬は何しろ寒いところだぞ」と、おどかされた。(続く)

俳句鑑賞

俳句のモデル

高濱虚子に自筆の「喜壽艶」という句集があります。七十七歳にしてなお句う若さと艶を失わぬことを念頭に、艶麗なる七十七句を自選し記念出版しました。七十七句の中には、必ずモデルが居るのですが、他生の縁ということもあって、人物が特定されない句もあります。その中からモデルが特定できる数句を繙いて見ます。

椿子と名づけて側に侍らしめ

の一句があります。この句は東京浅草橋の人形匠吉徳の山田徳兵衛さんが、俳人千原叡子さん（日本伝統俳句協会関西支部長）の娘時代をモデルにして制作した人形です。古典的で雅びな童顔も日本風で、叡子さんの姿をよく写しています。ホトトギス九百号記念の際、山田徳兵衛さんが制作の過程をお話しされ、虚子のこの句で椿子物語が書かれ広く知られるようになりました。

父、悠々子にも、俳句のモデルとおぼしき一句があります。

大夏爐女網元美しく

お楽しみコーナー

3

俳誌悠主宰 水 見 壽 男

モデルは入船町中△(響)なう三仲谷さんの当時の女将さんです。痩身でいてきりりとしまった細面の美人顔。いかにも女網元の気風を裡に秘めた姿や話しぶりなどが思い起されます。

この句は夏爐という昭和二十年代の古平の自然の中ではまりもよく、横座に坐る姿を美しく浮き彫りにして、毅然とした女網元の姿を彷彿とさせます。海の俳人として名を馳せた父にして、人間を描いた粹のある一句と思われるよう。

古平浜町の菓子舗田畑さんの店頭に、高濱年尾先生揮毫の

磯遊び即ち広き磯かな

の半折が掲げてあります。同店の銘菓「磯」のもととなった一句ですが、この句は古平のモッコ岩あたりの海辺がモデルです。俳句は固有名詞をなるべく使用しないように指導しますが、この句は厳然として古平を特定しています。

昭和二十五年に年尾先生は古平を訪れ、そしてこの句を物し、店の先代田畑稲暁さんの求めに応え揮毫されました。大変貴重な記念碑的俳句の軸ものです。田畑稲暁さんの句集「磯」もこの句から名付けられました。

編集雑記

▽春の嵐の後は雪解けも急速に進み、桜前線も四国を出発しました。芽吹きと共に、豊富な郷土の話題を掘り起こしたいと考えております。

▽水見さん主宰の俳誌『悠』一ペーじに、『せたかむい』が紹介されました。読者層がより広がって、これもまたうれしいことです。

▽仕事の書き入れ時、今年もまた北海学園大生一八人のレポート作りに四日間付き合いました。学校でもこんなに勉強熱心？ イヤこんなやつたことはない！ 終わって、全真きちゃんと挨拶して帰りました。学芸員養成課程に在学中とのこと、今後更なる勉強を期待しております。

▽工藤二三雄さんから、祭典の8ミリテープ一巻(年代不明)が寄贈になりました。ありがとうございます。

▽古平一穂の会から会報4号が発行になりました。ご愛読ください。

▽「ふるさとのアルバム」大愛好評のうちに第3集(建物編)も品切れ、いまひとつ人気の盛り上がりがない？ 《石碑》について、第4集を発行の予定です。これを機に、石碑にも関心と親しみをもってもらえれば——と、期待しております。

短歌

吉平町岬短歌会

雪まつり観むと発ちトンネル事故にあひ還らぬきみらよ
今日は命日

春来れば芽吹く猫柳抱き遠く来て夜更け語りしきみを
思ふも

竹内 コト

風もなく細かき雪の降りしきり餌埋もれば雀らも来ず
軽やかに積りし雪に羽根を清め鴉は身を一振りし何処へ
か去る

奥山 きよみ

二日程の留守に凍てしかセントポーリア日の経つにつれ
葉のしなれ垂る

帆いっぱいに明るき黄の花活けて玄関飾りぬ春待つ心

鈴木 時子

俳句

吉平ホトトギス会

ここだけの話広がり春寒し 斉藤波留

声高に経読む姑や彼岸入る 山口悦子

布袋腹つき出る臍や寒の水 越野敏雄

春航の無事を祈りし護摩火焚く 大和田絵伊

ゆるやかな川面に浮ぶ鴨四羽水音たてて低く飛び去る
菜の花もスイートピーも柔かな春の香りは部屋一杯に

田中 香苗

いとほしき親指ほどの雛人形おのがためにと初に飾りぬ
藍深く海の暗さも日々かはり大きくうねる早春の波

堀 典子

春風やつるつる路面犬まろぶ 関口勝志

春寒し湯げ立ち上る檜風呂 よしざきり

灯台を濤叩きゐるし虎落笛 越野清治

上架船化粧とゝのへ春隣 仲谷比呂古

夫作る粥の優しさ風邪に効く 室屋弘子

幸平 吟

人影の無き元朝の船溜り

似た様な成人式の和服かな

焼詣や別誂へのりヤカーで

鮫鰯の裂かれるまでを見てをりぬ

鮫鰯の口に入らぬ糶値かな



訂正 ⑩雪掻きの疲れをいやし山の温泉へ 斉藤波留
⑪雪掻きの疲れいやし山の温泉へ 斉藤波留

古平町史年表

11

明治33年(1899)

- ▲浜町登記所が廃止、小樽区裁判所古平出張所となり、美国町が管轄区域になる。
- ▲古平郵便電信局が局舎を港町高台に新築し、古平郵便局と改称する。
- ▲丸山町から出火し35戸を焼失。

明治33年(1900)

- ▲農会法によって古平町農会が設立され、小樽外六郡農会に加入する。

明治34年(1901)

- ▲小樽警察署古平分署が新地町から港町の古平郵便電信局跡に移転する。
- ▲高橋与助が鴨居木で水稻栽培に成功する。
- ▲沢江村より出火、13戸を焼失。失火によるもので女性が1人焼死する。

明治35年(1902)

- ▲古平に2級町村制が施行され、大字を浜町・港町入船町・丸山町・新地町・群来村・沖村・沢江村・歌棄村とし、田村和六が初代町長に任命される。
- ▲美国・積丹の2郡が古平の管轄から離れる。
- ▲総代制が廃止され、初めての町会議員選挙(定数12人)が行われる。有権者数は町会議員258人、道会議員89人、衆議院議員54人
- ▲第1回町会で収入役に高野平治が選任される。人口5,398人、町予算18,399円81銭

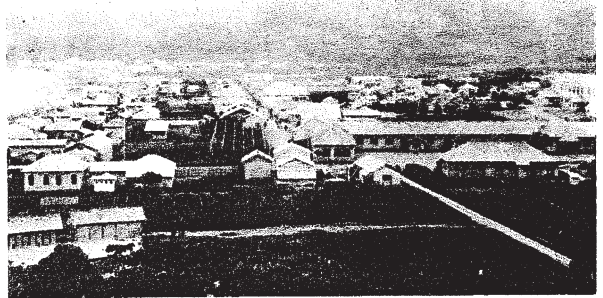
明治36年(1903)

- ▲小樽裁判所古平出張所が新地町の高台に移転
- ▲浜中尋常高等小学校が古平尋常高等小学校と改称、沖・沢江分教場がそれぞれ独立して、沖尋常小学校・沢江尋常小学校と改称する。
- ▲古平水産組合を創設する。

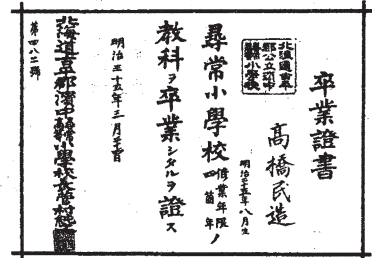
明治37年(1904)

- ▲2級町村制の規則により、古平町内を7部に分部長を置く。(後の町内会長の役割といえる)
- ▲新地町でこたつの不始末から火災があり、新地座など13戸を焼失し、男女2人が焼死する。
- ▲古平川の氾濫で古平川の仮橋が流失し、洪水は浜町一帯に及んだ。

古平尋常高等小学校校舎(写真右側:明治26年新築)



浜中尋常高等小学校
卒業証書(明治35年)



古平尋常高等小学校
卒業証書(明治37年)



小樽支庁からの辞令
(小樽支庁が珍しい)

小樽支廳

明治三十七年九月九日

北海道支庁長官収入役ノ命

高野平治

2級町村制により初めて収入役が任命される

古平町役場

明治三十七年九月九日

月俸金貳拾

円給與ス

古平町収入役高野平治